



高野ムツ才選

死に絶えし星のひかりも冬の星

西東京市 永井 康信

【評】 冬空に輝く星。中には今は存在しない星もある。天文学的な判断はさておき、星の光が何万年という気が遠くなる彼方から届くと知って空を仰いだときの美感。

一人去りひとりとなりし焚火かな

日立市 菊池 三夫

【評】 数人で焚火を囲んでいた。二人だけとなり、最後は一人となった。焚火の炎に無言の声をかけながら、その火が消えるのを待った。

駅弁を膝に広げて雪国へ

小田原市 北見 鳩彦

【評】 さあ、待ちに待った旅。行き先は川端康成の「雪国」の舞台、越後湯沢。駅の駅弁からの展開が期待感を高める。締め「へ」も効果抜群。始発待つ車掌も白き息を吐き

風花やヘルン旧居の軒低き

福岡市 無 草

公魚のくねりしままに揚げられる

龍ヶ崎市 小宮 光司

焼諸屋「大寒小寒」流し来る

長野県 村田 実

大冬木一番星と交信す

八王子市 徳永 松雄

老骨のいまだ硬骨雪を掻く

白河市 円谷 淑子

鉛筆の芯ほど日脚伸びにけり

神奈川県 中島やさか
仙台市 佐藤 庄陸

正木ゆう子選

双六に未婚の叔父のくははらず

大野城市 野分 のわ

【評】 大人入り交じっての子供の遊びに、一人離れてゐる。親戚中に一人は居るが、繊細でシャイな叔父さん。伯父ではなく、叔父だから句になる。そこが俳句の面白さだ。

冬銀河百科事典は屋根裏に

枚方市 秋岡 実

【評】 電子辞書あり、検索ありで、重々しく鎮座している百科事典が、いに屋根裏へ。しかし紙の媒体は不滅。銀河に近く、再びの出番を待つ。短調の犬の遠吠え暮の冬

短調の犬の遠吠え暮の冬

大阪市 高橋 智代

【評】 狼の遠吠えは、確かにあまり明るいものではない。止みがなく本能に促されたら悲しさといおうか。短調といえは短調。帰国まつダウンジャケットより

強霜や太極拳の手に朝日

三原市 上脇 立哉

濡縁の干反りはげしき冬夕焼

群馬県 斎藤真紀子

真夜中の裏六甲や冬銀河

東京都 望月 清彦

やつとさ余生の目処や梅ひらく

神戸市 久下 明

銀世界ゆったり歩く引退馬

越谷市 角田 貞男

手袋をはづし改めての握手

我孫子市 安倍 芳彦
大阪市 今井 文雄

小澤 實選

初雪や床のガム削ぐアルバイト

伊勢市 藤田ゆきまち

【評】 床に吐き捨てられたガムを削ぐだけの仕事があるのではなく、床の掃除のなかでそれがもっともたいへんな作業になるということだろう。初雪が何か希望に感じられる。カチャカチャと牛乳喝るや冬の朝

カチャカチャと牛乳喝るや冬の朝

尾張旭市 小野 薫

【評】 「カチャカチャ」は牛乳瓶と牛乳瓶とが触れ合って鳴る音、牛乳配達が来る音なのだ。冬の朝に聞こえる音としてふさわしいと思う。顔の肝斑なんぞ気にせず日向ぼっこ

顔の肝斑なんぞ気にせず日向ぼっこ

葛城市 山本 啓

【評】 「肝斑」はしみのこと。陽光に当たると顔のしみが拡がること心配する人もいるようだが、それは気にせず冬の太陽にあたたまるわけだ。しんと鈴振る巫女や冬深し

水枯れて錆びし空き丘露わなり

松江市 三方 元

寒風やホットドッグをばりと噛む

横濱市 佐藤 祐一

鱈汁の鱈のころつとほぐれけり

小諸市 藤 雪陽

ごまめ噛む前歯の欠けし老人が

横濱市 岡 一夏

餅つきはゴツンゴツンと響くなり

東京都 吉田 徹夫

夜学生昼弁当の残り食ふ

枚方市 中川かてい
大阪市 貝田ひでを

津川絵理子選

ドラマの部屋常に片付く冬薔薇

横濱市 宮川 ゆず

【評】 そういえばドラマに出てくる部屋は大抵片付いている。薔薇が似合いそうな部屋。こんなところに目が行くとはドラマに集中してないのかも。観察がよく効いている。寒木の倒れぬやうに歪みけり

寒木の倒れぬやうに歪みけり

松原市 たろりずむ

【評】 寒木の歪みの理由は倒れないためだ、という発見が良い。木に限らず人間にも当てはまりそうだ。自分の身に引き付けて詠んでいる。保健室登校の子と蜜柑むく

保健室登校の子と蜜柑むく

静岡市 山本 正幸

【評】 給食の蜜柑だろうか。保健室には登校できるのだ。一緒に蜜柑をむきながら話をして、子の心をほぐしていく。お互いに大切な時間。手袋をはづし饒舌手話の人

出会ひたる川流れ出す雪野原

東京都 大武美和子

朝の光少しゆがめて初水

下田市 森本 幸平

凍星や瓦礫の街のぬいぐるみ

津山市 渡辺 牛二

百歳の一息に飲む玉子酒

奈良市 浦城 亮祐

鳥影の忙し冬日の雑木山

大分市 後藤 利夫

寒灯下ライブ青年半ばは自棄

富士宮市 渡辺 春生
佐野市 村野 則高



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

年間賞 俳句 ②

スコップの柄で叩き折る軒氷柱

小金井市 高橋広子

【評】 この軒氷柱はそうとうに太く、長い。握り慣れたスコップの太い木の柄で、激しく叩き折るしかないのだ。スコップの金属の部分で打ち当てると、変形してしまう危険もあると感じているのかも知れない。握った手に、たしかに響く衝撃までも感じ取ることができる。背景に強い寒さがある。強烈な寒さを見せている句でもあるのだ。(小澤實)

介護課の液体糊に秋日かな
【評】 窓口の備え付け、糊に日が当たっている。液体なので秋の陽光を透して黄金色。ただそれだけの句であるが、介護という現場の複雑さを、この小さなありふれたモノが、黙って物語っているようだ。窓口に来ている人も、いまこれを読んでいる読者も、一人一人に事情はそれぞれ。解釈も感想も、百様の受け取り方の可能な句である。(正木ゆう子)